

肉用牛肥育における粗飼料給与の重要性

講 師 明治乳業株式会社肉用牛部 井 出 終三郎

日 時 平成3年2月5日

報 告 伊 東 繁 丸

1) 素牛の選定

良質粗飼料を十分に食わせた骨格の丈夫な牛を選定する。導入時にはストレスを最小限にし、病気を予防するとともに、病気は早期発見・早期治療・早期治癒に心がける。

2) 導入後の馴致飼育

牛群の観察、個体管理表の作成と記帳観察・チェック

3) 肥育前期

餌馴らしは3週間かけて行う。全体的に粗飼料は上質のものをを用い、所定量(3.5kg)を確実に食わせる。敷料については牛が汚れないよう細心の注意を払う。低カロリー・高タンパク飼料で体力を作り、内蔵を十分に発達させる。

4) 肥育中期

牛房内の頭数を調整する。管理は前期同様で、確実に食い込ませていく。

5) 肥育後期

仕上げ期であり、牛床はゆったりした状態に調整する。濃厚飼料を飽食させ、稲藁は制限する。鉾塩とミネラルは充分に与える。水はきれいなものを与える。ストレスを最小限にする。

以上のような管理条件でA5を80%だしている。これらの点から考えても、高級牛肉生産においては、特に管理方法の影響が大きいことが推察された。

牧場における当面の改善策としては、群飼育条件下でのストレスを防止するため、除角を急ぐ必要がある。入来牧場での生産方式の特徴は、一貫体系にある。従って、個体ごとのカードを作成し、血統、分娩、育成および肥育の各段階におけるデータを蓄積し、全体の分析を行って、各段階における最適条件を究明することが必要である。現在のところ、粗飼料は肥育段階では全て輸入飼料に頼っているため、品質が優れたものが入手しやすい時期に多量に買うことも必要である。黒毛和種去勢肥育では、枝肉格付けでA5を出すことが現状での目標になるので、井出氏の講演内容を実践に移していきたい。